

あゆみ通信

VOL. 106

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 浪花 博
広報 本持 喜康

共に一念仏の道を歩む



御影堂での報恩講

文字通り秋を迎える10月は、多くの仏事を大半終えて、「報恩講」を迎える。第2組でも、10月初めに昨年からの第2組の総力を挙げて取り組んできた陀4期推進員養成講座の後期講習＝本山研修を終えたら、11月14日(火)に第2組合同の報恩講が即應寺で開催される。今、あらためて「報恩講」について考えて見たい。(本)

報恩の道

親鸞聖人は、本當の依り処を失って苦悩している私たちに、本當の依り処は阿弥陀如来の浄土であること、そこに目覚めて、そこに立って生きる道が「浄土真宗」であることを頭かにしてください。そして、聖人はその道の要(かなめ)を「本願の名号に帰命して、本願を信じ念仏せよ。そしてそこに開かれる如来の浄土を依り処として、凡夫の身のままに、往生の浄土の道を歩む人生(生活)を生きよ」と教えて

下さっています。しかし私たちは、すでに聖人の教えに遇い浄土真宗を歩んでおられる方のご指導をいただかなければ、聖人の教えに本当に遇うという事が出来ないのではないのでしょうか。

(中略) 私は父の死に会う何年も前から「自分はこれで本当に生きていると言えるのだろうか」という漠然とした不安を持っていましたが、大谷専修学院の院長である信國淳先生の「出会い」という文章を拝読し、お逢いして教えをいただこうと先生をお訪ねしました。(中略)

「信心がはっきりしたところから、生涯をかけた本当の学びが始まるのだ」という先生のお言葉は、往生浄土の道を歩みなさいと教えを促してくださっているのだと思います。往生浄土の道とは、如来の浄土に支えられて、わが身と社会の現実と一つになって、そこでこそしょうどのはたらきを証していく道だと思っています。

報恩講は、多くの先達の恩徳により今日の私たちにまで伝承されている、聖人の教えに友にで出会う場であり、御同朋としての出遇いと交わりを深める場です。

(岡村廣慶《長崎教区願生寺》
「報恩講」東本願寺発行より)

第2組報恩講案内

日時 2017年11月14日(火)
午後5時30分から
会場 即應寺(阿倍野区)
内容 お勤めと法話。懇親会
門徒総会
講師 高間重光先生
(藤井寺市 了信寺)
参加費 2000円(お
斎料)
別途、御案内します。



あゆみの会総会

日時 2017年12月17日(日)
午後2時から
会場 了安寺(天王寺区生玉寺町)
内容 総会、法話、懇親会
講師 王来王家純也先生
(大阪教区駐在教導)
参加費 2000円
(お斎料他)
別途、ご案内します。



煩惱具足の凡夫

推進員講習を修了して、仏弟子としてお仲間と共に、組推協「あゆみの会」に参加して、お寺や第2組の聞法会に参加して、先生のお話をいろいろ聞かせてもらっているつもりだが、蓮如さんが言われるように「心得たと思うは心得ぬなり」が身に沁みる。

娘の体調が良くなって、検査の結果、直腸に原因があり、ストマを着ける手術を主治医に言われたと聞いて、自分の心が振り出しに戻った。しばし迷ったが、「生老病死」。娘に寄り添うしかないことを、思い起こしたことである。(本)

南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本

第2組聞法会報告



2017年8月25日(金) 午後2時より、今年最後の第2組聞法会「共に学ぶ『正信偈』」が、大阪市浪速区の唯専寺(迹見隆子坊守)をお借りして開催され、組内の住職・寺族・門徒・推進員24名が参加した。

講師は引き続き新田修巳先生(平野区正業寺)をお招きし、「正信偈」の「廣由本願力廻向為度群生彰一心」についてお話いただいた。

先生は、仏に遇うとは本願力廻向(南無阿弥陀仏)に遇うことであり、南無すなわち帰命とは、阿弥陀の心に背いてしか生き得ない事実、「申し訳ない」と頭が下がることである。また、生(＝老病死)をどう受け止めていったら良いかということが、聞法の課題であり、聞き続けて行きたいと話された。(記事＝細川克彦)

新田先生法話要旨

「廣由本願力廻向」は、本願力の廻向によって生きとし生きるものを救うために。「為度群生彰一心」は、一心すなわち他力の信心の徳を明らかにされた。



本願力の廻向

小学高学年の思い出ですが、図書室で「無題」という詩集を涙無しでは読むことが出来ませんでした。「原爆で全身やけどの少女がトマトを食べたいと言うので、母親が買い出しに行っている間に少女は死んでしまった。母親は「芋ばかり食べさせて死なせてしまった」と泣いた。みんなも泣いた」という短い詩です。

私は最近まで「母親は少女に、どんな言葉を掛けたらいいのか」と悩んでいましたが、一言声をかけるとしたら「南無阿弥陀仏」しかないように思いました。これが今日のテーマ「本願力の廻向」です。



生老病死

生きて行く上での大きな問題は老病死です。これは生きて行く原点で、どう受け止めていけばよいのか。それは「教え」の中で受け止めるしかありません。それが聞法です。

その「教え」とはどんなものか。法然上人は「選択本願念仏集」の中で「南無阿弥陀仏、往生の業は念仏を本とす。また曰く、それ速やかに生死を離れんと欲さば親鸞聖人は「生死を超える」

「恵信尼消息」の中で「生死いずる道は『ただ念仏して』」生死を超える道は他にあると思っていますが、無いことに気付かされ、納得させられるとともに、間違っ

いたと頭が下がるのです。



鈴木大拙先生

学生時代、「南無阿弥陀仏」の意味内容はよく承知していましたが、どういう感覚で受け止めればいいのか困っていました。鈴木大拙先生の講義は何度か受けましたが、先生は私が25歳の時、96歳で亡くなられたことを知りました。「教行信証」の翻訳等、英語は堪能で、最後は聖路加病院の日野原先生が担当されていました。

秘書の岡村美穂子さんが「先生、何か欲しいものはありませんか」と尋ねたら「NO NOTHING THANK YOU(いいえ、なにもいりません ありがとう)」と応えられたそうです。これが「南無阿弥陀仏」というお念仏の言葉だと気付きました。私も「NO NOTHING THANK YOU」という六字の言葉をいただいて生・老・病・死を生きぬいて行きたいと思いますと締めくくられました。

(写真・文章＝浪花 博)

(事務局の都合で聞法会の報告を細川克彦氏と浪花博氏に助けていただきました。ここに報告し、お礼申し上げます。)

